めた水をくみ上げて中ノ口川へ放流する鳥潟ポンプ場を造ることとし、事業は昭和四十五年に着手、昭和六十三年に完成した。それまでは、農業用排水路を利用しての排水であったために、大雨の場合には排水しきれずに市内に水がたまってしまっていたが、この都市下水路の完成で、集中豪雨での心配も最近では少なくなった。しかし、排水能力以上の豪雨になれば、やはり完全に安心とは言い切れない。降雨量が多くなると、水害を体験した人たちに恐怖がよみがえる。「あのときの川の流れ方は違っていましたね。今でも大丈夫とは思っても雨が降ると、心配になって川の水位を見に行きます。やっぱり気になりますからね」と付近の住民は口をそろえて言う。昭和三十六年当時の記憶は薄れつつある。しかし、災害はいつ起こるか分からない。

一昨年、上越地方を襲った七・一一水害はまだ、記憶に新しいことだろう。

平成七年七月十一日、新井市では一晩で一四四ミリを越える雨が降り、市内を流れる関川が氾濫。上流では、川の水が田んぼより高くなり、大きな石が転げ落ちてくる。そんな中、住民は指示に従って素早く避難。下流の住民にも危険を知らせる広報車のアナウンスが聞こえ、川の水が次第に下流にも押し寄せてきた。「まさか、ここまで水がくるわけがない」。そう思っていた住民たちの避難が少し遅れた。幸い、逃げ遅れるほどではなかったにせよ、水を甘く見ていたことが時間のロスにつながった。

市内流域のあちこちの橋が通行止めになり、停電や断水、電話回線不通などライフラインの寸断で、情報が入らない。孤立した地区の住民は、いっそう不安を募らせた。

水が引いた一の町（白根神社わき）

ある市民は「目の前で堤防が崩れ、青々とした田んぼに流れ込む。あっという間の出来事で、言葉になりませんでした。思い出に残る川が様相を変えたのを見て、自然の恐ろしさを感じました」と、当時を振り返る。

この市内流域のほとんどが被害に遭い、堤防の決壊、家屋の流失などの大きな被害に見舞われ、被害総額は約百十七億円に及んだ。新井市始まって以来の大災害に、市民は自然の恐ろしさを改めて認識したという。

災害時には、正確な情報の素早い伝達とすみやかな行動が被害を最小限に防ぎ、避難をスムーズにさせる。しかし、非常時には、それさえもできない場合があることを七・一一災害は教えてくれる。

いつ起こるか分からない災害―。しかし、それは決して過去の出来事ではない。

水の恐怖は終わらない
雨で大増水、そのとき白根は水面下に…

信濃川と中ノ口川に挟まれた中州が、私たちの住む白根の地です。最も低い場所で海抜マイナス〇・三メートル、最も高い場所でも海抜五・五メートルにすぎません。もし、二つの川が雨で増水すると、たちまち私たちの頭上まで水位が上がります。つまり天上川に一変するのです。

いったん、大洪水により破堤や越水が起これば、濁流が一気に流れ込んできます。前ページまでに紹介した昭和三十六年の八・五水害の恐いところは、破堤ではなく、越水したことでした。「まさか、まさか」と思っているうちに水が堤防を乗り越えてきたのです。自然を相手に「これで大丈夫」ということはありません。この白根の地に住む以上、水の恐怖は去ることはないといえるでしょう。

信濃川が大増水したとき、私たちの白根市をはじめ、各地でどのような対策が取られるのか、またどんな危険性をはらんでいるのかを検証してみましょう。

信濃川堤防のほとんどは水防上、危険な箇所

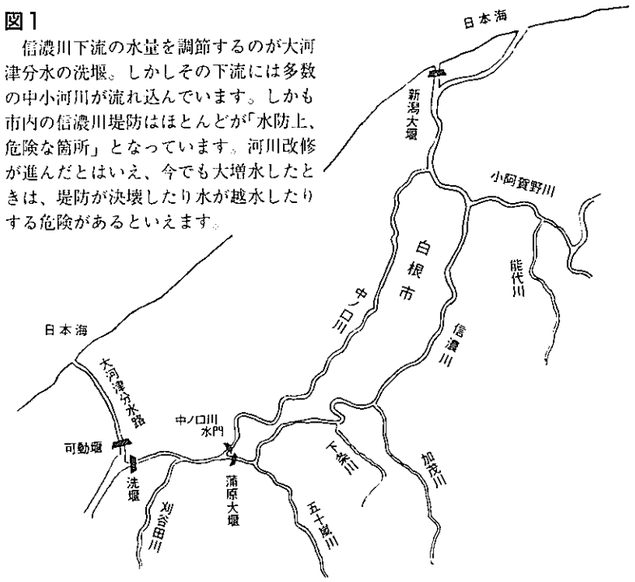
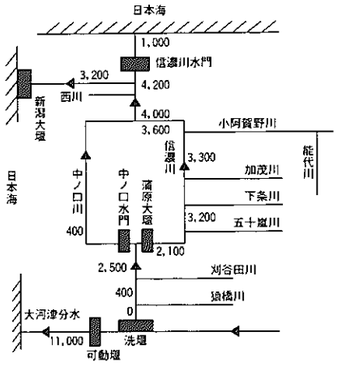
大雨や雪解け水などで信濃川が増水したとき、私たちを水害から救ってくれるのが大河津分水です。上流部で増水すると分水の洗堰が閉じ、可動堰が開いて、水を日本海へ直接流す仕組みになっています。

明治時代、毎年のように起こっていた水害から越後平野を救うべく、分水の実現に向けて運動を開始したのは、白根市出身の田沢与一郎・実入親子でした。「東洋一」とうたわれた大工事の末、大正十一年に完成したこの分水路のおかげで、度重なる水害は一挙に減りました。しかし水の恐怖はまったくなくなったわけではありません。

図1をご覧ください。洗堰の下流には刈谷田川、五十嵐川、加茂川、能代川、小阿賀野川など、氾濫を繰り返してきた中小河川が目白押しです。これら河川の上流部は堤防の改修が終わり、かつてのような破堤はなくなりました。そのため大雨や雪解けなどのとき、水は信濃川へ直ちに流れ込んでくるのです。

水害に弱いとされる中ノ口川方面は、いざというときには信濃川との分流点で中ノ口川水門が閉じ、蒲原大堰が全開となって水を流すという仕組みになっています。一方、市内の信濃川方面は増水時に水を逃がす川はありません。加えて堤防の高さは不足し、幅も狭く、決壊や越水の危険性はかなり高くなっています。このため、市内の信濃川の堤防のほ

図1
信濃川下流の水量を調節するのが大河津分水の洗堰。しかしその下流には多数の中小河川が流れ込んでいます。しかも市内の信濃川堤防はほとんどが「水防上、危険な箇所」となっています。河川改修が進んだとはいえ、今でも大増水したときは、堤防が決壊したり水が越水したりする危険があるといえます。



計画高水流量図
何百年に1回という大洪水時に、川がどれだけの水を流すことになるかを予想したのが下の図です（単位m／秒）。信濃川では、各中小河川から水が流れ込むことから、下流へ行くほど数値が高くなっているのが分かります。